

Bulgari 塾

埼 玉県鳩ヶ谷市に本拠を置くエアロコンセプト。小さな町工場で、菅野敬一氏が率いる職人たちが、航空機部品の製造技術を応用した書類鞆や名刺入れ、ギターケースといった品々を、ハンドメイドで作っている。

素材は航空機部品に使われるジュラルミンやアルミ合金。そこにイタリアンレザーがあしらわれ、温かみと豊かな風合いを添えている。例えばB4サイズがちょうど入る書類鞆は、軽さと重さのバランスが絶妙。レザーの質感が手に馴染む。ヒンジ部分や、持ち手と本体の接合部分など、可動部の動きは極めて滑らかだ。

世界を魅了するこれらの品々は、高度な技術によって生み出される。「本業は、航空機部品の作成。軽さと丈夫さが求められるため、米国で定められた『ミリタリースタンド』と呼ばれる精度規格で作らなければならない。千分の数ミリという誤差範囲内で金属板を切断したり折り曲げる、精密な技術が必要なのです」と菅野氏。

エアロコンセプトはそんな菅野氏のクラフツマンシップにより作られる。材料は0.6mmまたは0.8mmの薄い金属の板。このままでは容易にたわむが、縁を折り曲げ、互いに組み合わせることで、頑丈な部品に生まれ変わる。「リップ構造」と呼ばれる、航空機部品によく使われるものだ。金属を接合するリベットや、ヒンジ部のちょうつがいなども、ミリタリースタンドに適合する部品を使っている。

ジュラルミンの鞆には無数の穴が開いており、それこそ航空機の部品のように見える。最初はこの斬新な見栄えに目を引き付けられるが、これは奇をてらったものではなく、普段、航空機部品を作る菅野氏が真剣に鞆を作った結果、自ずと取り入れられた意匠。ブレの無い作り手の姿勢から生まれた独自のデザインである。

エアロコンセプトを作るため、新たに開発した技術もある。金属製の本体側面や、持ち手にレザーを貼り合わせるのがその一つ。「この部分は皮革加工の高度な技術を持つ職人に頼みました。ただでさえ伸び縮みするレザーを、『金属部品の精度に合わせて加工してもらいたい』と。向こうにとっても常識を覆す注文。いつも大喧嘩でした」。

鞆を開めた時、ラチェットと呼ばれる金属部品が発する音もそう。極めて優しく、耳に心地いい音だ。「ライカのシャッター音のようにしたくて。ラチェットのバネの強さを調整するなど、この部分を完成させるためだけに半年くらいかかった」。

菅野氏にとってクラフツマンシップは、機能を高めることより、むしろ人の感性に訴えるためにある。「形のないものを作りたい」と菅野氏は語る。形のないものとは、いさぎよいか、優しい、思いやりがあるなど、心のありよう、体験、感動のことだ。「例えば、訪問先にその鞆を持って行くだけで『今日はあなたに会いに来たんです』という気持ちが相手に伝わる。そういうことが大切だと思う」。

“作りたいのは「形のないもの」
例えば優しさ、思いやり”



エアロコンセプト 代表職人

菅野敬一氏
KEIICHI SUGANO

1951年東京生まれ。早稲田実業高校卒業。91年、菅野製作所の3代目社長に就任するがバブル崩壊後に倒産。その後、再起を果たし現在、エアロコンセプト代表職人、株式会社深澤代表。エアロコンセプトはイタリア、ロンドンの一流セレクトショップでも扱われている。

日本人や日本企業が長年培ってきたノウハウや仕事に対する姿勢を、選りすぐりの講師たちから学ぶ「ブルガリ塾」。第2回の講師はエアロコンセプトの菅野敬一氏だ。航空機部品の技術を応用し、鞆などをハンドメイド。それを求めて欧州の王族、ハリウッドスターなど世界中のセレブリティから注文が舞い込む。世界を魅了するモノ作りはどのように行われているのか？

菅野氏は「自分が欲しいと思うものを作ろう」とエアロコンセプトを始めた。そのきっかけは会社の倒産だった。祖父の代から続いた板金加工会社を継いだものの、大口得意先の経営方針転換によって受注が激減。43歳の時である。その後会社は復活するが、「負債を抱え、死ぬしかないと追いつめられた時、『生きていた間に自分のほしいものを、唯一、残った板金という技術で作ろう』と考えた」。

最初に作ったのは、設計図を入れるためのごく薄い鞆。それを持って取引先などを訪れるうち、口コミで評判が広まり、小売店のバイヤーが「うちで扱いたい」と鳩ヶ谷の工場を訪れるようになった。しかし、取引先を増やして商品をより多く売ることはしない。「バイヤーから『ここに仕切りを増やしてほしい』とか『バッグをもう少し厚く』と頼まれるのですが、断っている。多く売れなくてもいい。それよりも自分が考えている良さが削られる妥協のほうがよほど恐ろしい。マーケティングによって生まれる商品は平均点レベル」。クラフツマンシップが生んだエアロコンセプトは、はるかにそれを突きぬけている。

「若い世代に技術を伝えるのが自分の最後の役目」と菅野氏は語る。「若い職人に、『自分が信じたことなら、失敗を恐れず一度はチャレンジしろ』と言っている」。そう語る菅野氏がエアロコンセプトを立ち上げたのは49歳の時。チャレンジは若者だけのものではないことも、菅野氏は身を持って示している。

次回ブルガリ塾 講師は青柳正規氏

主催 ブルガリ ジャパン
協力 日経ビジネスオンライン企画編集センター
日程 10月30日(水)19時30分～21時
参加料 無料
定員 20名(抽選制)
講師 国立西洋美術館館長 青柳正規氏(右写真)



古代ギリシャ・ローマ美術史研究の第一人者として、30年以上にわたり、地中海各地の遺跡で発掘調査を行った青柳氏。古代文明が後世の文化にいかにより多大な影響を与えたのか？歴史に学ぶことの重要性を物語る講義を行う。
■ 独立行政法人国立美術館理事長、東京大学名誉教授。1944年大連生まれ。ギリシア・ローマ考古学者。67年東京大学文学部美術史学科卒業。69～72年ローマ大学文学部古典考古学留学。文学博士。日本学士院会員。著書は、『皇帝たちの都ローマ』『トリマルキオの饗宴』(共に中公新書)、『ポンペイの遺産』(小学館)など多数。

エントリーアドレス http://business.nikkeibp.co.jp/as/bulgari_juku/
参加ご希望の方は上記URLから、お手続きをお願いします。10月17日登録締め切りとなります。

お問い合わせ
ブルガリジャパン ☎03-6362-0100 <http://jp.bulgari.com/>

ブルガリの精神にも相通じる

「金属から削り出したケースの質感がいい。一見するとシンプルながら、よく見ると沢山の面があって複雑。職人が奮起して作っているのが伝わってくる」

と菅野氏が職人らしい視点で語るのは、2012年9月に国内で発表されたメンズ向けリストウォッチ「ブルガリ オクト」だ。効率優先ではなく、手作業で丁寧に、完璧なものを旨とする。この時計が体现しているブルガリのモノ作りに対する姿勢は、菅野氏と共通している。

ケースは円と四角形が交差して作られる力強い八角形で、合計110の面から成り立つ。全ての面を職人が手作業で磨き上げる。ケース内部にもポリッシュ仕上げとサテン仕上げを施すという凝りよう。

シースルーバックから透けて見える自動巻きのムーブメントにも職人の技が光る。歯車の軸を手磨きし、歯車にはサテン仕上げが成されるなど細部にまで細かい装飾が施されている。腕から外した時のみ、見ることができるムーブメントの美しさにもこだわるのが、真の高級時計の証でもある。

落ち着きと風格を漂わせながら、身につけた人の個性をも際立たせる。



ラウンド型ベゼルによって縁取られた八面体は、純粋な古典主義の美的監督を持つ、大胆でありながらも繊細な運命を示唆する。

右: ステンレススチールケース 88万2000円
左: ピンクゴールドケース 247万8000円